

## 二〇一四年度 センター試験 漢文 解説速報

## 【問題講評】

難度はほぼ平年並み。問題数は昨年より一問減ったが、ほぼ同じと考えてよいだろう。最後の設問が定番の内容合致ではなかったため、時間が迫ってから解いた人にとっては、ちょっと厳しかったかもしれない。

基本的には、授業や講習でやって来たことで充分対処できたと思う。特に「エピソードと教訓」というパターンは、センター試験対策の短期ゼミや冬期講習で繰り返し説明し、主題の登場する位置についても何度も説明してきたので、段落切りの問題は楽勝だったと思う。満点、もしくはそれに近い得点ができたと期待したい。

## 【設問解説】

問1 例によって漢字の意味を問う問題。今年は熟語ではなく、ストリートに意味を問う形式で来た。

(1) 「習」には「習う」と「慣れる」の意があることは授業でも何度か説明した。当然ここは「慣れる」の方で④が正解。

(2) 「尚」には動詞で「たつとぶ」という訓があった。よって③か⑤に絞れるが、文意から味の話なので③を選ぶ。

問2 返り点と読み方の組み合わせを選ぶ定番の問題。まず選択肢から「目」が動詞であると見当をつける。「以清嗜」は「清嗜を以て」だから③と⑤に絞られる。後半は「成長したものは採らない」という意味だろうから、③は「目す」の位置がよくないので⑤を選ぶ。

問3 たまに出る空所補充の問題。選択肢を見れば「苦」と「甘」の組み合わせだとわかる。文中ではこの二字は、筍の味についての対義語となっている。だとすれば、当然「棄てる」のは「苦いもの」で、「取る」のが「甘いもの」となる。よってIとIVが「苦」で、IIとIIIが「甘」となり、①が正解となる。

問4 簡単な解釈の問題。「猶」に返り点がついているので再読文字であるとわかる。よって「〜のようだ、〜と同じだ」というような意味になるはず。もうそれだけで正解を選べるが、一応残りの部分も見ると「切られるのを免れる」だから、正解は⑤と簡単にわかる。

問5 これも簡単な書き下しの問題。「莫不…」はもちろん「…ざるはなし」という二重否定の形。よって①と③に絞る。あとは「貴と賤」「取と棄」という対義語同士の組み合わせを考えれば、「取るを貴び棄つるを賤しむ」では文意に合わない。「貴は取られ賤は棄てられ」で③が正解となる。

問6 センターでは比較的めずらしい段落切りの問題。これは授業でもセンター試験でよく出るタイプとして紹介した「エピソードと教訓」のパターンであることは気がついたと思う。主題が出てくる場所4パターンも覚えているだろう。当然「夫れ」（発語）で始まる（エ）からが主題（この場合エピソードから導き出される教訓）だから、①と③に絞る。（ア）と（イ）のどちらで切れるかと考えれば、江南の人についての話の前振り（ア）で終わりなので①が正解となる。

問7 定番の内容合致問題ではなく、文の読みと筆者の主張を組み合わせるといって、ちょっととめざらしいタイプの問題。荘子の「無用の用」については、冬期講習でやった諸君も多いので「ああ、あれだ」と思ったことだろう。まず「無用の用」の意味から、④と⑤に絞れる。あとは「比」を「くらべんや」と読むか「たぐひなるか」と読むか。「豈」で始まった後も反語ではなく疑問や詠嘆になるものが最近のセンター試験ではたびたび出題されていることは、授業でも何度も指摘しておいた。さらに文中の筍のたとえから、「苦いものが取られずに全うする」と言っているから、⑤の方が内容にふさわしいと見当がつく。

## 【書き下し】

江南竹多し。其の人、筍を食うを習ひとす。春の時に方たる毎に、苞ほうこう甲土より出で、頭角けんりつ繭栗おほむ、率ね以て採食に供す。或いは蒸じょうやく淪して以て湯と為し、茹じょかいちやせん介茶き・以て饋あに充つ。事を好む者目するに清嗜せいしを以てし、方に長ずるを斬とらず。故に園林豊美、複垣ふくゑんちようけい重扇しゆうせんにして、主人居きよしやう嘗きよしやう愛護すと雖も、其の之を食らふに甘しとするに及ぶや、剪伐せんぼつして顧みず。独り其の味の苦くして食品に入らざる者のみ、筍常に全まつたし。毎つねに溪谷がんにく巖陸がんりくの間に当たりて、地に散漫して収められざる者は、必ず苦くきに棄てらるる者なり。而るに甘かんき者は之を取りて或いは其の類を尽じんくすに至る。然らば甘かんき者は自ら戕そこなふに近く、而るに苦くき者は棄てらるると雖も、猶ほ剪伐を免るるがごとし。夫れ物類は甘かんきを尚たつとびて、苦くき者は全ぜんきを得たり。世に貴は取られ賤は棄てられざるは莫なし。然れども亦た取らるる者の幸ひならずして、偶たまたま棄てらるる者に幸ひなるを知る。豈に莊子の所謂無用を以て用と為す者の比たぐひなるか。

## 【現代語訳】

江南には竹が多く生えている。江南の人は筍を食べることを習慣としてゐる。春がやってくるたびに、外側の皮が土の中から顔を出し、その角のような形の新芽が繭や栗くらいの大ささの時に、たいてい採って食用にする。蒸し煮にしてスープにしたり、穂先の柔らかい部分はお茶と一緒に食卓に並べる。食べる事が好きな人(食通)は清雅な味を好むので、伸びすぎた筍は(えぐみが強いので)採らない。だから、幾重もの垣根や門扉をしつらえた美しい庭園で、その家の主人が平生愛護している竹林であつたとしても、その筍を食べて美味しいと思つたら、構わずに掘つてしまふ。ただえぐみが強くて食用に適さないものだけは、放つておかれて無事竹になるのだ。溪谷や山の中にあつて、採られることもなくはびこっているのは、必ず苦くて食べられないものである。けれども美味しいものは採られて、まわりの同類まで根こそぎ取り尽くされてしまうこともある。だとすると、美味しいものはその美味しさで自らを損なつてゐるようなもので、苦いものは棄てられてゐるけれど、そのせいで切られるのを免れているようなものだ。そもそも世の物のたぐいは、うまいものを貴ぶけれど、苦いものの方が身を全うすることができる。貴いものが採用され、賤しいものが見棄てられるのは世の常である。けれども、取られたものの方が不幸で、たまたま棄てられたものの方が幸せとすることがあるということがある、この筍の話からわかるだろう。これは莊子が言っている「無用を用となす(一見役に立たないように見えるものにもちゃんとはたらきがある)」というのと同じような話であろうか。

出典は明の陸樹声(平泉)の「苦竹記」という文章。長く官途に就けなかつた自らを苦い筍にたとえて、開き直つた随筆的な作品。

(2014/01/18 23:50 作成)